

欧州の学生ら60人が 多摩キャンパスに

欧州青年日本研修 デスカッションや弓・剣道体験

中大キャンパスにヨーロッパから60人の学生たちがやってきた。中大生との交流・異文化体験のために。小春日和の11月5日、Aグループ30人の「in 多摩キャンパス」を報告する。

(学生記者 小野光雄)

経済学部のゼミ教室に20人ほどの学生たちが机を囲んだ。長身、体格もよい男性や、ブロンスヘアの女性の姿。教室に入るなり記者はそばにいたベルギー人の女性に「ハイ」と気さくな様子で話しかけられた。中大生ら日本側も約半数。いまからデスカッションが始まるようだ。一人の男性が英語で話し始める。「自己紹介から始めよう」

欧州青年日本研修。ヨーロッパで日本に関心のある人を選考し、交流を通して日本を知ってもらおう、という外務省のプログラムである。このとして25回目。24カ国・EUの学生や青年計60人が来日、日程は国会の見学や中小企業の訪問、日本人の家庭でのホームステイ、老人ホーム見学……原爆の被爆地、広島や古都京都、奈良も訪れる。中央大学では日本人学生とのデスカッションを通じた交流・文化体験が行われた。中大訪問は初めて。夏に外務省のインターンシップに参加したのが中大の女子学生だった——それがきっかけに。「彼女が法学部教授の柳井先生のゼミ生だった縁で先生にお願いしたら、快く引き受けていただいた」とプログラム担当の外務省事務官の中野美智子さん。

デスカッションは安全保障や教育、環境や地域統合など午前と午後で計8つのテーマで行われた。安全保障部門の討論では沖縄の軍事基地問題、日米の同盟関係、北朝鮮の脅威などがテーマになった。使用言語は英語、中大生も伍して議論に加わる。大学院博士課程の雨野統さんは「ヨーロッパの人たちが北朝鮮について普通の日本の学生より知っているのではと思うくらいの知識があったのが驚き」と語る。デスカッションリーダーを務めたアイルランド人のトレポーさんは「いいデスカッションだった。日本人との交流も有意義だった」とふりかえった。

教育がテーマの議論では各国の教育システムの現状や日本の不登校や引きこもりの問題、さらにコミュニケーションツールとしての言語などについて話した。ポルトガルのマリアさんはイタリア語、フランス語、ドイツ語、英語、母国語のポルトガル語併せて5カ国語を話すことができる。鈴木耕一郎さん(総政1年)は参加の動機をこう話す。「ヨーロッパに興味があった。国際インターンシップという授業で教育をテーマに話していたので参加した。違う国の現状を知ることができ、むしろこの感じがつかめた」。奥山勝史さん(商1年)は「留学したいと思っています。だからとりあえず英語を話さずにはいられないと思って」と途中から飛び入りで参加した。意欲十分。

デスカッション後は学食でランチタイム。ベルギーからきたサンギユル(女性)さんは学食の込みようにびっくりしたという。選んだのは魚と天ぷらとライスとサラダ。味は？と聞くと、「おいしかったわ」と答えた。中大生の印象を「人あ

りがよく、ころよく私たちを受け入れてくれた」と話す。大学では外交を専攻。「ダンスが趣味でよく踊ったりもする」と明るい。

夕方5時から、一行は二手に分かれてアリーナと弓道場へ。アリーナでは剣道部の練習の様子を見学した。袴に防具を竹刀を持った姿は珍しいらしく、しきりにカメラやビデオを回す人の姿も。剣道部の部員も試合が近かったようで本番さながらの真剣勝負に見入る人もいた。丁寧に柳井先生が英語で剣道のルールや礼を説明していた。

一方、弓道場では、弓の持ち方を体験。自分の背丈より長い弓を持ち、弦を静動作から引くという一連の動きを弓道部員から手ほどきを受けた。夢中になって弓を持ち続ける人も。弓道衣姿の部員も外国人と片言の英語で話している。双方にとって得がたい「異文化体験」にちがいがなかった。11月19日には、Bグループ30人が多摩キャンパスを訪れた。



「日本事情」の講義を熱心に受講



活発に議論



弓道体験は真剣に



剣道見学。「型」と「礼」を学ぶ



美貌の：サンギユルさん。 from ベルギー